

学位論文要旨

学位論文題目 日中絵画の交流及び影響関係の一側面―「形似画」の観点から―

申請者氏名 趙 忠華

本研究は日中絵画の交流について、特に「形似画」という視点から分析するものである。この概念の導入により、日中絵画の交流の歴史をこれまでにない視点から解明することができると考えられる。本論文はこの「形似」あるいは「形似画」というキーワードを基軸に、日中絵画の交流および影響関係の一側面を考察してみたい。本論文は4つの章を取り上げて、それぞれの概要について以下の通りである。

まず第1章では室町時代に日本から中国渡航した禅僧画家・雪舟をとりあげる。ここでは、雪舟の作品の中にある形似画的な特質を考察する上で、時代的(時期的)観点、地域的観点、交流・交友的観点という3つ観点から考察を試みてみたい。これらの観点のもとに、伝存する雪舟作品と、関連の中国絵画との具体的な比較検討を試みる。従来の少なからぬ雪舟研究においても、そうした雪舟画と中国画との比較研究がなされてきたが、ここではそうした先行研究もふまえながら、従来の研究では言及されてこなかった側面を中心に論を進めてみたい。そして当初の目標である雪舟画における形似画的な要素の抽出に焦点を当てたいが、実はそれを考察する上で、その対照的側面としての、雪舟画における写意画的な要素についても当然のことながら言及していかなければならない。そうして最終的には、雪舟画における形似画的な要素と写意画的な要素の並存がどのように行なわれたかを示している。

第2章においては、江戸中期に日本に来船した中国清代の画人・沈南蘋と、彼が日本の画人たちに伝えた南蘋画風の拡がりについて考察したい。それを考える上で、まず南蘋画の形似画的な要素を検討し、その特質を南蘋自身の作品をもとに整理をしてみることとする。さらに師である胡湄や明代画院画家・呂紀などの花鳥画との関連を、形似画的な観点から論述し、次にこの南蘋画風というものが、広く日本全国に拡がった重要なファクターとしての画譜の盛行との関わりについても、考察を進めてみたいと思う。また南蘋画風の拡がりということで、とくに与謝蕪村と円山応挙における形似画的な観点からの南蘋画受容の特質についても論じてみたい。そして最後に、これまでほとんど論じられていなかった19世紀つまり幕末期から明治期への南蘋画風の継承について論及してみたいが、このことを考察する上で、京都で活躍した山口の画家、小田海僊についてその花鳥画における南蘋画風の受け入れと、その形似画的な画風の形成の特質について述べ、その特質が京都の近代画家たちにどのように受け継がれたかを示している。

第3章では、日本近代における中国からの留学生の絵画習得の様相について考察したい。そこで考察の俎上に乗せたのが、何香凝・陳之佛という2人の中国人美術留学生である。何香凝は、田中頼章という日本画家に学び、東京の私立学校である女子美術学校でも学んだ。彼女はのちに中国の革命運動家としても名を駆せるが、その習得をめざした絵画がどのようなものであったのかを考察してみたい。そしてもう1人の画家が、近代中国美術において図案教育と工筆花鳥画の普及に尽力したといわれる陳之佛の花鳥画の形似画的な要素について論述する。彼はとくに京都の近代日本画家今尾景年の画風を習得し、その工筆画的な描法を中国に伝えることとなるが、その実相を、彼の形似画の習練の過程にあったことを論じている。

そして最後の第4章では戦後の中国において、日本の代表的画家として早くから紹介されていった東山魁夷、平山郁夫、加山又造の3人の画家の活動について考察してみたい。戦前から若手画家として活躍した東山。戦後のシルクロードに取材したエキゾチックで重

厚な作風が知られる平山。戦後日本画の急先鋒のひとりとしてめまぐるしくその作風を変転させた加山。この3人の中国画との関連を探りながら、彼らと中国画との関係、彼らの形似画的な要素を各々の作風で示した活動が、中国画における形似画的な要素にどのような影響をもったかを考察している。

そしてこれらの論考を通して、室町期から現代に至るまでの形似画的な要素をもつ絵画が、日中両国の交流の中で、どのように受け継がれ、どういう意味をもって互いの絵画の変遷に影響を与え合ったのかを論究している。

学位論文審査の概要と結果

| | | | |
|---|----------------------------------|-----|------|
| 報告番号 | 東アジア博 甲 第 124号 | 氏 名 | 趙 忠華 |
| 論文題目 | 日中絵画の交流及び影響関係の一側面 - 「形似画」の観点から - | | |
| (論文審査概要) | | | |
| <p>申請者が提出した論文は日中絵画の交流について、「形似画」という視点から分析するものである。「形似画」という概念を導入して、日中絵画の交流および互いの影響関係をこれまでにない視点から解明しようとしており、序章と終章を含めて計6章の構成になっている。</p> <p>序章では研究背景と問題提起、また形似画の定義および他の画種との相違について論じている。「形似画」は新しい概念であり、「主に物象を忠実かつ細密に描いたり、物象の輪郭線を繊細と精緻な筆線で描いたりして、その上艶麗な色彩を表した絵画のこと」と定義している。</p> <p>第1章では室町時代に日本から中国渡航した禅僧画家・雪舟を取り上げ、雪舟の作品の中にある形似画的な特質を含めて、時代的視点、地域的視点、交流・交友的視点という3つ視点から考察を行っている。伝存する雪舟作品と関連の中国絵画との具体的な比較をしつつ、従来の雪舟研究で言及されてこなかった側面を中心に論を進めることで、雪舟画における形似画的な要素と写意画的な要素が並存していることが明らかにし、またその並存がどのように行なわれたかを示している。</p> <p>第2章では、江戸中期に日本に來舶した中国清代の画人・沈南蘋と、彼が日本の画人たちに伝えた南蘋画風の広がりについて考察している。まずは南蘋画の形似画的な要素を分析し、その特質を南蘋自身の作品をもとに整理をしている。次にこの南蘋画風というものが、広く日本全国に広がった重要なファクターとしての画譜の盛行との関わりについて考察している。また南蘋画風の広がり、特に与謝蕪村と円山応挙における形似画的な視点からの南蘋画受容の特質について論じている。最後に、これまで殆ど論じられていなかった19世紀、つまり幕末期から明治期への南蘋画風の継承について論じている。このような考察をすることで、京都で活躍した山口の画家、小田海僊について、その花鳥画における南蘋画風の受け入れや形似画的な画風の形成の特質、またその特質が京都の近代画家たちにどのように受け継がれたかを示している。</p> <p>第3章では、日本近代における中国からの留学生の絵画習得の様相について考察している。考察の俎上に乗せたのが、何香凝・陳之佛という2人の中国人美術留学生である。何香凝は、田中頼章という日本画家に学び、東京の私立学校である女子美術学校でも学んだ。明治以降の西洋からの新潮流を取り込んだものであったが、特に何香凝が接近したのは当時の新派系の作風よりも旧派系の作風のなかにある近代性であったと結論付けている。また当時同じく日本に留学して日本画を学んだ嶺南画派の画家たちと2人の画家たちとの画風の相違点、共通点についても検討し、それらの形似画的・写意画的側面の特質についても論述している。最後に、主に京都の近代日本画家今尾景年の画風を習得し、近代中国美術における図案教育と工筆花鳥画の普及に尽力した陳之佛について、彼が工筆画的な描法を中国に伝えたとなるが、その実相は形似画的な習練過程にあったことを論じている。</p> <p>第4章では、1970年以来、日中絵画の交流および中国絵画の変貌にも大きな影響を及ぼした東山魁夷、平山郁夫、加山又造という3人の画家に着目して、彼らの制作活動の本質を「形似性」をもとに探っている。戦前から若手画家として活躍した東山、戦後のシルクロードに取材したエキゾチックで重厚な作風で知られる平山、戦後日本画の急先鋒のひとりとして目まぐるしくその作風を変転させた加山といった3人について、中国画との関連を探りながら、彼らの形似画的な要素を各々の作風で示した特色ある制作活動や普及啓蒙活動が、現代中国画における形似画的な要素(工筆画、重彩画、岩彩画など)にどのような影響をもたらしたかを考察している。</p> <p>終章では、各章をまとめ、本研究の結論と今後の課題について述べている。これらの論考を通して、室町期から現代に至るまでの形似画的な要素をもつ絵画が、日中両国の交流の中で、どのように受け継がれ、どういう意味をもって互いの絵画の変遷に影響を与え合ったのかを論究している。</p> | | | |

以上の学位論文の内容から、審査委員会は次のように評価した。

1. 創造性について

絵画における物体の形を再現する表現形式として、日本では写生画や写実画、中国では工筆画や院体画、といった分類があるが、日本と中国の両国の状況を含め、さらに古代から現代までを通観できる言葉としての概念はこれまでなかった。この論文では、これらの地域的、歴史的分類をすべて包含した概念として「形似画」を導入し、日中絵画の交流および互いの影響関係をこれまでにない視点から解明しようとしている点は、その独自性や創造性からも優れている。

2. 論理性について

序章では「形似画」という概念を定義した上で、写生画や写実画、また工筆画や院体画との相違について、先行研究を引用しながら論じている。第1章から第4章までは、「形似画」を基軸に、取上げられた画家たちの作品を分析した上で、日中絵画の交流および互いの影響関係について一貫性のある展開から結論が導かれていることから、その論理性の観点からも十分に達成できている。

3. 厳格性について

中国語の文献と日本語の文献を古代のものから現代のものまで可能な限りカバーしており、また関連する先行研究も、日中両国の諸論考が、丁寧に渉猟されている。また取り上げられている中国と日本の画家およびその作品についても詳細な分析が行われている。こうしたことから、厳格性においては達成できている。

4. 発展性について

「写意画」の対立語として「形似画」なる概念を導入したことによって、日中絵画の交流・影響の研究に新しい研究方向性をもたらすことが期待できる。さらに、油絵の様相を「形似画」なる観点のアプローチによって、西洋絵画研究の発展にもつながる。よって、発展性においては優れている。

以上より、全体的に達成できている。

論文審査結果

合・否

審査委員

(氏名)

葛 崎 偉

(氏名)

菊 屋 吉 生

(氏名)

石 井 由 理

(氏名)

森 下 敏

(氏名)

印